

●二人で味わう古典和歌(55)

寂しさや思ひよわると月見ればこころの底ぞ秋深くなる

藤原良経

藤原良経ふじわらのよじつねの自撰家集『秋篠月清集』あきしのげつせいしゅうの一首。

正確には『式部史生秋篠月清集』。「式部史生秋篠月清」

とはだれかという、式部省(文官の教育・人事を担当する省)の下級の事務官の秋篠月清という架空の人物。あえて低い身分を名乗る良経のペンネームなのである。

最上流貴族(撰関九条家の二代目、のち撰政太政大臣)の遊び心かもしれないし、本当に俗世を逃れたい気持ちを含めたのかもしれない。

政治家としてはさほど手腕を発揮しなかったが、歌人としては抜きん出た才能をもつ良経を、いち早く認め最高の賛辞を送ったのは、後鳥羽院であった。

『後鳥羽院御口伝』ごとばぎんぐちでんには、良経の歌について、風格の高さを主としつつ詠風は変化に富んで難がない。難がないのが逆に難といえるほどだ、とまで記されている。



定家・家隆をはじめ、俊成に学んだ次世代歌人たちが、競い合って登場した時代。良経は、歌人としてもパトロンとしても新風和歌の気運を盛り上げ、新古今時代の担い手として活躍した。

右の歌は、いまだ二十二歳の「花月百首」のなかにある。「寂しいなあ。こんなに寂しい心弱りをどうしよう」と月を眺めると、心の底までも秋が深くなる」。

「こころの底ぞ秋ふかくなる」という、不思議に新しい孤独の表現に目を瞠る。急逝した兄への思いを読むべきかもしれないが、それ以上にこの歌人の、深くやわらかく屈折した心と、ずば抜けた表現のセンスを感じる。

残念ながら、この歌はいずれの勅撰和歌集にも見当たらない。いわば見落とされた名歌。そして、ほぼ八百年のちに、「詩歌の真実に渴く幾人かがある日偶然この匿れた傑作にめぐりあい、先蹤批評の先入感抜きにじかに相聞可能であることを喜ばねばならない」と、塚本邦雄に言わしめた歌でもある(筑摩書房刊『藤原俊成・藤原良経』「心底の秋」)。

(小島ゆかり)